

バリ島カラングサムのエコツーリズム エコツアーの現状と人材養成の課題を中心に

小林正典 所員／現代人間学部教授

——はじめに

インドネシアは豊富な観光資源を有しているが、広大な国土の中、とりわけ観光業が集積しているのは、バリ島（Pulau Bali）とペニダ島（Nusa Penida）等の周辺諸島から構成されるバリ州（provinsi Bali、以下「バリ」と称する）である。1967年にグラ・ライ（Ngurah Rai）空港が開港すると、サーファーが集まる海浜にすぎなかったクタ（Kuta）やレギャン（Legian）のビーチ周辺は、若者をターゲットとする歓楽街へと大きな変貌を遂げた。一方、70年代以降は、東部のチャンディダサ（Candidasa）、アメド（Amed）、北部のロビナ（Lovina）、西部のプラキ（Pulaki）も、ビーチ・リゾートとして徐々に開発が進められてきた。その後、80年代になると、南部のヌサドゥア（Nusa Dua）でビーチが開業したのを契機に高級リゾート開発が進められ、その北側に隣接するブノア（Benoa）はマリン・アクティビティの中心地となる。90年代になると、バリは典型的なマスツーリズムの観光地として大きく飛躍を遂げるに至り、毎年多額の外貨収入がもたらされた。しかしながら、2002年10月12日に欧米人が多数集まるクタのディスコで自爆テロが発生すると、観光業は大きな打撃を受けた。その後、一時的に外国人観光客数が回復したものの、2005年10月1日にジンバラ（Jimbaran）とクタで同時多発の自爆テロが起こると、バリを訪れる観光客は再び激減する。近年、バリを訪れる観光客は増加に転じ、観光業は勢いを盛り返しているものの、空港から離れた地域の観光業は必ずしも良好とはいえないようである。

マスツーリズムを中心に活況を呈してきたバリの場合、その利益は地元住民に幅広く行き渡るものではなかったが、近年、それに替わる新たな観光（alternative tourism）としてエコツーリズムが政府によって提唱されるようになった。本稿で考察の対象となる北東部のカラングサム（Karangasem）県（以下、カラングサムと称する）は、元来、王朝がおかれて栄えていた地域であり、エコツアーの題材と

なる観光資源は少なくない。また、カラングサムは豊富なダイビング・スポットに恵まれていて、世界各地から数多くのダイバーが海の生物鑑賞を楽しむためにこの地を訪れてくる。それゆえこの地域は、陸と海の両方でエコツアーを発展させる可能性を秘めている。このような想定に基づき、筆者は和光大学総合文化研究所の研究プロジェクト活動「インドネシアの人のための観光産業支援に関する研究」の一環として、2009年8月25日から同月29日、2010年8月23日から9月1日、計二回バリ島および東に隣接するロンボク島において現地調査を実施した。

エコツアーの状況を考察するには、詳細な統計データを活用するのが有効であろう。しかしながら、一般の観光ツアーとエコツアーの峻別は必ずしも容易ではなく、一般の事業者とエコツアー事業者も明確に区別されているわけではない。旅行者についても、一般の観光ツアーを利用しながら、部分的にエコツアーに参加する者も少なくない。さらに、バリの村落は行政村（Desa Dinas）と慣習村（Desa Adat）の2種類があり、エコツアーの主体となるのは慣習村であることも計量的な分析を難しくする要因の一つになっている。このような点をふまえ、当該研究においては、主として聞き取り調査の結果からカラングサムのエコツアーの現状を整理し、エコツーリズムを実践する上での課題を明らかにした。

なお、本稿では言葉の輪郭をある程度示すにとどめておくが、文化観光とは、当該地域の伝統や歴史等の文化的な要素を観光商品として観光客に提供することで顧客の満足度を満たす観光をいい、自然観光とは、当該地域の自然資源を観光商品として観光客に提供することで顧客の満足度を満たす観光を指す。また、エコツーリズムとは、当該地域の自然資源および伝統や歴史等の文化的な要素等を観光の対象としつつ、それらに与える損失を最小限に保つことで持続可能性を高める観光のあり方をいい、エコツアーは、エコツーリズムに基づいて企画、実施される観光ツアーを指す。なお、地元への利益還元を重視しないもの、インタープリテーション（interpretation）¹⁾ やそれを実践するインタープリター（interpreter）を欠くものについては、たとえそれが当該地域の自然資源および伝統や歴史等の文化的な要素を尊重する観光であっても、エコツーリズムの範疇に含めない。そして、自然が豊かな農山漁村地域に滞在し、もっぱらその地域の自然・文化や住民との交流を楽しむ観光は、グリーンツーリズム（アグリツーリズム）として区別している。

1) インタープリテーションの概念については、フリーマン・ティルデン（Freeman Tilden）の定義が広く知られている。それによると、インタープリテーションとは単に事実に基づく情報を提供することではなく、本来の物の利用、直接的な経験、説明用の媒体によって、背後の意味や関係を明らかにすることを狙いとする教育活動を指す。詳しくは、Freeman Tilden (Author), R. Bruce Craig (Introduction), Russel E. Dickenson (Foreword), *Interpreting Our Heritage*, 4th edition, The University of North Carolina Press, 2008.

1 ― バリの観光旅行産業と新たな観光

(1) バリの観光旅行産業の経済規模

インドネシアにおける観光旅行産業は、国内の経済や雇用においてどの程度の比重を占めるのであろうか。この点に関しては、表1によると次の点を指摘することができる。①インドネシアの観光旅行産業の経済規模は、他の東アジア・東南アジアの国と比べてGDPに占める割合が相対的に低い、②インドネシアの観光旅行産業従事者の国内雇用者に占める割合も、他の東アジア・東南アジアの国と比べて相対的に低い、③観光旅行産業の直接的経済規模に限定すると、観光旅行産業従事者の国内雇用者に占める割合は、東アジア・東南アジアの国々の中で最下位になる。

観光を統括する省庁の名称が「文化観光省」(Ministry of Culture and Tourism) であ

表1 東アジア・東南アジアの国の観光旅行産業の経済規模 (GDP及び雇用、2009年)

国名	観光旅行産業のGDP				観光旅行産業による雇用			
	観光旅行産業 ²⁾ (直接的経済規模)		観光旅行経済 ³⁾ (直接・間接的経済規模)		観光旅行産業 (直接的経済規模)		観光旅行経済 (直接・間接的経済規模)	
	金 額 (10億米\$)	GDPに占める割合 (%)	金 額 (10億米\$)	GDPに占める割合 (%)	人 数 (千人)	国内雇用者に占める割合 (%)	人 数 (千人)	国内雇用者に占める割合 (%)
インドネシア	12.63	2.30	43.61	8.10	2,030	1.90	7,028	6.70
マレーシア	10.45	5.50	26.86	14.10	627	5.70	1,395	12.70
フィリピン	4.71	2.90	11.43	7.00	1,096	3.10	3,082	8.70
カンボジア	0.94	8.50	1.99	18.00	478	6.50	1,025	14.00
ラオス	0.22	4.00	0.65	11.70	87	3.10	262	9.40
ミャンマー	0.82	2.80	1.66	5.60	604	2.60	1,193	5.10
タイ	16.39	6.20	36.45	13.90	1,868	4.90	3,959	10.50
ベトナム	3.77	4.00	11.79	12.60	1,412	3.10	4,576	10.10
中国	100.48	2.10	445.48	9.40	16,729	2.10	58,680	7.50
韓国	14.65	1.70	63.14	7.60	581	2.40	1,986	8.40
日本	178.07	3.40	473.74	9.20	2,370	3.70	6,278	10.00
世界	1,877.27	3.20	5,433.70	9.40	81,992	2.80	236,490	8.20

出典：日本アセアンセンターのサイト掲載の統計データ (Website of World Travel and Tourism Council) による2009年の推定値を基に作成
<http://www.asean.or.jp/ja/asean/known/statistics/6.html/pdf/5-9.pdf> アクセス日：2012年1月10日

- 2) 観光旅行産業とは、供給側経済活動別の分類をいい、この分類に入る項目として、航空会社、ホテル、レンタカー会社等、従来の観光旅行業者が含まれる。
- 3) 観光旅行経済とは、観光旅行業が直接間接に当該国経済に寄与する最も広い範囲をいい、この分類には、観光旅行産業の他、従来の観光旅行業者への供給者からなる川上産業である燃料会社、配膳業者、クリーニング業者、会計事務所等、さらに当該国の観光旅行業に係る資本投資、政府支出、輸出に関連している製造業、建設業、政府等が含まれる。

ることからも分かるように、インドネシアは国を挙げて自然と文化を融合させた観光に力を入れているが、国全体で見ると、観光旅行産業はGDPや雇用の面においてさほど大きな比重を占めていない。

しかしながら、「神々の島」とも形容されるバリは、大半の住民が土着の信仰とインド仏教やヒンドゥー教が習合したバリ・ヒンドゥーを信仰する点でイスラムが普及した周辺の島々とは異なる魅力を醸し出しており、1983年にバリの地方開発計画局（BAPPEDA）がバリ州統計局、ウダヤナ大学経済学部と共同で試算した結果でも、バリにおいては観光業部門がGDPの約10%の形成に寄与している⁴⁾とされた。

また、バリは外国からの観光投資を積極的に呼び込んで観光開発を成功させてきた⁵⁾ことが知られており、表2と表3からも明らかなように、2010年にはインドネシアのホテルにおける外国人宿泊客総数の過半数をバリが占めるに至っている。2004年にリアウ（Riau）州から分離したリアウ諸島（Kepulauan Riau）州には、シンガポールに隣接するリゾート地のピンタン島が属するため外国人観光客数が多いものの、その数は首都のジャカルタ（DKI Jakarta）と合わせてもバリに遠く及ばない。バリは、まさにインドネシアを代表する観光地である。

表2 行政区分別格付のあるホテルにおける外国人宿泊客数

（単位：千人）

年度	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
バリ（Bali）	1,033	1,651	1,461	1,261	1,561	1,865	2,068	2,413
リアウ（Riau）	637	527	654	41	18	14	17	18
リアウ諸島（Kepulauan Riau）	-	-	-	753	745	711	788	717
ジャカルタ（DKI Jakarta）	625	705	713	652	785	654	651	882
インドネシア全体	2,955	3,527	3,584	3,430	3,862	4,143	4,640	5,175

出典：インドネシア中央統計局の統計データをもとに作成

http://dds.bps.go.id/eng/tab_sub/view.php?tabel=1&daftar=1&id_subyek=16¬ab=4 アクセス日：2012年1月10日

表3 行政区分別格付のないホテルにおける外国人宿泊客数

（単位：千人）

年度	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
バリ	888	704	734	670	877	1,016	831	1,370
リアウ	24	34	100	0.7	0.6	0.5	1	1
リアウ諸島	-	-	-	71	57	81	39	29
ジャカルタ	13	13	15	4	11	14	12	11
インドネシア全体	1,147	1,061	1,030	885	1,146	1,327	1,224	1,736

出典：インドネシア中央統計局の統計データをもとに作成

http://dds.bps.go.id/eng/tab_sub/view.php?tabel=1&daftar=1&id_subyek=16¬ab=6 アクセス日：2012年1月10日

4) 間苧谷榮「バリにおける観光業と伝統的舞踊—インドネシアにおける開発と文化」『重細亜大学国際関係紀要第1巻第1号』（1991年11月、73頁）

5) 国土交通省「観光投資に関する調査・研究報告書 概要版」2007年3月、14頁。

(2) バリの新しい観光

バリの観光地を具体的に見ると、州都デンパサール（Denpasar）市の近郊にウルワトゥ寺院（Pura Uluwatu）やタナロット寺院（Pura Tanah Lot）といったバリ・ヒンドゥー文化を象徴する景勝地の他、伝統芸術が集積しバリ舞踊の中心地となるウブド（Ubud）がある。これら主要な観光地の周遊は、外国人観光客をターゲットにするたいていのバック・ツアーに含まれており、その大半はマスツーリズムの形態をとる。しかしながら、ヒンドゥー教寺院観光の中には、アグン山（Gunung Agung）中腹の標高900mにあるブサキ寺院（Pura Besakih）^{6）}のように、バリ・ヒンドゥーに関心を寄せる観光客が比較的少人数で観光するツアーもある。これらは少人数のツアーという点でエコツーリズムの理念を先取りする面があるが、最近では、観光客の増加に伴って一部の寺院システムに変化が生じ、バリの社会的文化的受容能力の限界を超える事態も起こりつつある^{7）}。種々の問題をはらみながらも、既存の観光とは異なる視点から新しい観光に関心を寄せる観光客が増えるにつれ、バリでもエコツアーを銘打った観光商品が紹介されるようになった。

ちなみに、バリでエコツアーが導入されるようになった背景については、「バリ島における昨今のエコ観光・自然体験観光の興隆は、大衆観光から持続可能な観光やオルターナティヴツーリズムへという世界的な動向を背景としつつ、インドネシア政府の規制緩和・地方分権化の推進に直接的な後押しを受け、これまで観光開発から縁遠かった地域の観光開発を掘り起こそうとする地方政府（州・県・町村レベル）や、従来型のバリ観光の商品が飽和状態を迎えつつある中でなお見込みある観光産業領域へ進出しようとする外国人やバリ人の企業家の思惑が、たがいに一致をみたことの結果である」としながら、「バリにおけるエコツーリズムは、基本的に大衆観光型の開発と結びついたものである」とする見解がある^{8）}。

また、先行研究の中には、「豪華なリゾート」と「限られた予算の観光客」というバリ観光の二類型に依拠し、前者は「主として高所得集団やツアー・グループにサービスを提供する近代的大ホテルが、法人によって所有・経営されている。一種の資本集約的な飛び地を形成していて、地元の経済との結びつきは弱い」とし、後者については「大半は「ホーム・ステイ」型の宿泊施設からなり、その他小さなカフェ・レストラン、自動車やバイクのハイヤー・レンタル、マネー・チ

6）この寺院はヒンドゥー教の3大神（破壊の神シヴァ、保護の神ヴィシュヌ、創造の神ブラフマ）をあらわした3寺院を中心に大小30もの寺院から構成され、バリ・ヒンドゥー全体を統括している。いわば総本山であるものの、デンパサールからの移動時間がかかることに加え、寺院に関する観光ガイドしか立ち入りを認められないので、バック・ツアーにここを組み込みにくいという事情もある。

7）間苧谷榮「バリ島における観光業と寺院システム—観光と社会文化変動に関する研究（その一）」『亜細亜大学国際関係紀要第15巻第1号』（2005年9月、70頁）。

8）吉田竹也「バリ島のエコツーリズムの逆説」『島嶼研究第11号』2011年3月、41頁。

エンジャー、土産物店、衣類店等々など地元の人々の提供するサービスからなり、地元経済との結びつきは密接で多様』とする見解がある⁹⁾。

エコツーリズムは少人数の観光を前提とする点で、どちらかというとき後者の「限られた予算の観光客」の類型と結びつきやすい面がある。ところが、バリのエコツアーは、草の根の活動から発展したものではなく、上から政策によって導入されたものであり、「豪華なリゾート」型の観光政策を補完するものであるとしてもこれに代替するものではない。以上の点をふまえた上で、次節ではバリのエコツアーの概要をみることにする。

(3) バリのエコツアー

先行研究の中には、バリのエコツーリズムの主要な実践形態として、州政府が主導し村レベルで展開された「総合観光村」、民間主導で展開されている各種の動物園、官吏が主体のエコツーリズムである国立公園の三つを挙げ、これらはいずれも1990年代以降に成立し展開したものとする見解がある¹⁰⁾。このうち民間主導で展開されている各種の動物園については、一定の目的を持って生きた動物を一定の区域内に収蔵する点に鑑みると、エコツーリズムの範疇に含めるべきか否かについて意見が分かれるところであろう。それゆえ、本稿でもバリの動物園については考察の対象から除外している。

さて、ここでバリのエコツアーを地域で区分するならば、主に島の北東部にあるアグン山周辺、西部地区の国立公園、海岸部のダイビング・スポットに大別することができる。島の最高峰であるアグン山(3,142m)は、古くから島民の信仰の対象であり、この山の東西には火山脈が走っていて各所で温泉が湧き出るので、その周辺地域はしばしば噴火による甚大な被害を受けてきた。それゆえ、山の周辺はトレッキングの観光客が散見されるだけで、自然観察を主たる目的とするようなエコツアーはあまり発達していない。アグン山からさらに北西部に進むと、標高1,500mを超える昼間でも涼しいキンタマーニ(Kintamani)高原があり、バトゥール山(Gunung Batur)もこの中に位置する。バリ島の貯水機能を果たすバトゥール湖(Danau Batur)の他、プラタン湖(Danau Bratan)、プヤン湖(Danau Buyan)、タンプリング湖(Danau Tamblingan)も近隣の景勝地である。バリ島は水耕が盛んであり、年間を通じて水を利用できる中南部の山間地では棚田(Rice Terrace)が散見され、二期作や三期作が広く行われている。湖の南方に広がるタバナン(Tabanan)県のジャティルウィ(Jatiluwih)やパチュン(Pacung)等の棚田は景勝地として知られており、このような地元の伝統文化や生活様式に接する観

9) 間苧谷榮「バリにおける観光業と伝統的舞踊—インドネシアにおける開発と文化」『重細亜大学国際関係紀要第1巻第1号』(1991年11月、78頁—80頁)。

10) 前掲8)、37頁。

光は、少人数で周遊するエコツアーに適している。

バリ島の東部とは対照的に、西部は一部の海岸沿いを除いて集落が非常に少ない状況にある。バリ西部国立公園 (Taman Nasional Bali Barat) は、熱帯雨林、草原、山岳帯で構成され、固有種を含む多くの動植物がほとんど野生の状態であることから、エコツアーの有力なスポットになっている。しかしながら、西部の国立公園は、デンパサールから見て反対側に位置し、往復には半日を要することから、この地を訪れる観光客はある程度限定される。

ところで、バリ州政府は1989年頃から慣習村の観光ツアーを推進してきたことで知られているが、このようなツアーの中には、エコツーリズムの範疇に含まれるものも少なくない。まだまだ発展途上の段階にあるが、現在、上述のジャティルウィの他、ギャニャール県のスバトゥ (Sebatu)、パンリ県のパングリプラン (Penglipuran) といったバリの農村生活を体験できる「総合観光村」が整備されており、村内でのエコツアーも一部の観光客に認知されつつある¹¹⁾。既述の通り、バリの村落には行政村と慣習村の2種類があるが、観光開発の主体となるのは慣

図1 カランガサム県周辺の位置関係



11) バリの総合観光村については、山下晋司『バリ観光人類学のレッスン』東京大学出版会 (1999年、162—173頁) を参照。なお、山下は「この新しいタイプの観光が成り立つためには、エコ・ツーリズムの場合と同様、文化インストラクターのような資格をそなえた新しいガイドの制度と新しい意識をもった観光客が出現しなければならないだろう」と指摘する (同170頁)。

習村である。慣習村では、元来、土地や祖先神への信仰が盛んであり、島の各所で一年中何らかの祭りが行われている。慣習村の開発メカニズムは、伝統的な共同体的村落を枠組みとしながら、とりわけLPD（村落信用金庫）を要に、外部からの観光収入を村内に留め置き循環させる仕組みになっている。しかしながら、このシステムに関しては「村落の枠の中に閉じ込められたインボリューションの構造であり、これがグローバル化の中での村落自立への限界となる」とする指摘もある¹²⁾。

一方、バリ島の海側には、世界的に有名なダイビング・スポットが点在しており、それらに隣接する小規模リゾートではスクーバダイビング¹³⁾を楽しむダイバーで賑わいを呈している。この点について、先行研究の中に「①自然や環境を主題に掲げるとともに、②それを最小限の環境破壊による持続可能かつ小規模の観光開発という形態において進めることで、③観光地住民のエンパワーメントをはかる、といった点を、エコツーリズムの理念型として設定することができる」¹⁴⁾という前提に立ち、後戻りできない環境破壊の兆しとして「それまで寒村だったアマッド（Amed）周辺がダイビングの絶好のスポットとして発見され、今日、急速に観光開発が進んでいる」¹⁵⁾という見解がある。しかしながら、ダイビング・スポットの観光開発が環境破壊の兆しという指摘は必ずしも正確ではない。というのも、現在、スクーバダイビングによる水中ツアーの主流は、水中生物を捕獲するのではなく、環境に配慮しながら水中生物の観察や水中カメラでの撮影を行うものである。スクーバダイビングのポイントとして一定程度の集客力と収益性が見込めるからこそ、海を破壊せずに現状のまま維持することができる。仮にスクーバダイビングの観光客が来ないとなれば、ダイバーではない一般の海水浴客を受け入れるため、海水浴で怪我をしないようにサンゴは破壊され、その代わりに細かな白砂が投入されてプライベートビーチの形態に変化するであろう。あるいは、大型の船舶が着岸できる施設が建設される可能性もある。確かに中性

12) 今野裕昭「バリの観光開発と共同体的村落—グローバル化と地方分権化に晒されるデサ」『ヘスティアとクリオNo.2』2006年、49頁。

13) 海で最も一般的なレジャーが海水浴であることはいうまでもないが、海中で目を開けると慣れない者は不快に感じ、海中も鮮明には見えない。そこで、海で泳ぐ際には、顔にゴーグル（目だけを覆う水中メガネ）やマスク（目と鼻を覆う水中メガネ）を装着する。また、海はプールと違って波の抵抗を受けるので、足のキックによる推進力を増大させるべくフィン（足ひれ）を付ける。さらに、長い時間にわたって水面下を見るために、スノーケル（空気管）も使用する。マスク、フィン、スノーケルの3つが合わさると、スノーケリングやスキンドビングを楽しむことができるが、スノーケリングでは水中で生物を観察することができず、スキンドビングでは水中で活動ができてても滞在時間は限られている。そこで、空気が充填されたポンプを携えて潜水するスクーバダイビング（SCUBA=Self Contained Underwater Breathing Apparatus）が、フランスの海洋学者であるジャック＝イヴ・クストー（Jacques-Yves Cousteau）等によって考案された。

14) 前掲8）、36頁。

15) 前掲8）、42頁。

浮力¹⁶⁾を維持できない初心者ダイバーが海で潜れば、一定程度のサンゴはダイバーによって傷つけられるかもしれないが、それでも人工的なビーチや港湾施設の形に変えられてしまうよりは損失が少ないのである。

また、税の形で海の利用料を徴収して地元への利益還元を図るダイビング・ポイントが増え、ガイドの中にもインタープリテーションを実践する者が登場し、いわゆるレジャーとしてのファン・ダイビング（楽しみを目的とするスクーバダイビング）の中には、実質的にエコツアーの形態になっているものが大半を占めている。

とはいえ、スクーバダイビングによるエコツアーは、いろいろな器材を装備して水中で活動することからある程度のスキルの習得が必要であり、減圧症や窒素酔い等の危険性を避けるためにも、正しい潜水の知識を習得しておくことが要請される。また、どこでもスクーバダイビングによるエコツアーが可能というわけではなく、ダイビング・ポイントは一定の環境と設備の条件¹⁷⁾を満たす必要がある。さらに、スクーバダイビングの終了後は、減圧症を予防するため高所（一般に海拔300mを超える場所）への移動が制限される。海拔300mを超えない場所であったとしても、スクーバダイビングを終えた直後は、できるだけ低い場所に留まるのが健康管理の上で好ましい。それゆえ、スクーバダイビングと他の観光ツアーを組み合わせるには、日程、時間、経路を決める上で何らかの工夫¹⁸⁾が必要になる。スクーバダイビングによるエコツアーを考察する場合、このような一般のエコツアーと異なる特殊性に留意する必要がある。

2——カラングサムの状況とエコツーリズム

(1) カラングサムの観光の状況

図1から分かるように、カラングサムはバリ島の東部に位置し、ここに通じる舗装道路は一般道路であるため、空港からの移動時間が片道で少なくとも2時間から3時間程度かかる。空港周辺の宿泊施設から日帰りで散策するのは厳しいこ

16) 重さと浮力が釣り合い、浮きも沈みもしない状態をいう。中性浮力を作り出すスキルの習得は、安全かつ環境に配慮したスクーバダイビングを行う上で必須の項目である。

17) 具体的には、暖かい水温、良好な透明度、豊富な生物、ダイバーの興味を引く地形や沈船、ダイビング・スタイルに合った潮流、エントリー（entry）とエキジット（exit）に無理のない環境、ボートダイビングに適した船や港、講習に適した限定水域、タンクの充填施設やレンタル器材、ログ付けやブリーフィングに使える施設、交通の便と適度な移動時間、充実した宿泊施設等がある。

18) 一つの方法として、ナイトロックス（Nitrox、酸素濃度を地上の空気よりも高めた窒素と酸素の混合気体）を使用することが考えられる。筆者が現地調査を行った際、ガイドを通じて現地のダイビング・サービスからナイトロックス・タンクの入手を試みた。すると、入手は可能であるものの、ナイトロックス・タンクの在庫が少ないので、事前に予約を入れておくのが無難であると判明した。ナイトロックスの入手難易の状況については、以上の調査結果だけでは不十分であり、さらに計数的な観点から調査をする必要がある。

とから、エコツアーの対象は、日程的にカランガサム内での宿泊が可能な観光客に限定される。

海から少し離れたアムラプラ（Amlapura）は、元来、王朝がおかれて栄華を誇っていた地域であり、カランガサムの中心市街を形成する。カランガサムの人口（約40万人）はバリ州の中で平均よりやや多くなっているが、広大なアグン山を有する地域であることから、人口密度は平均よりもやや低くなっている。山側の景勝地の多くはアグン山の麓にあり、度々起こる噴火の影響によって動植物が壊滅的な被害を被ってきた。それゆえ、アグン山の周辺は、自然観察を楽しむエコツアーに適している場所とはいいいがたい。しかしながら、アムラプラの北西にあるティルタガンガ（Tirtagangga）は、アグン山から流れ込む湧水を使ったプールや噴水設備から「水の離宮」とも称され、緑溢れる棚田と相まって美しい風景を形成し、その落ち着いた雰囲気はクタやレギャンの喧騒を嫌う観光客に好まれる。

またカランガサムでは、「ケチャ」の原形ともいえる伝統芸能が、今日でも現地の人々に受け継がれている。アムラプラの南西には、カンベン・グリンシン（Kamben Geringsing）という独特の手作業による織物で知られるテンガナン（Tenganan）村があり、独特な習慣を保持してきたことで知られるバリ・アガ（Bali Aga）¹⁹⁾ が住んでいて、少人数での観光ツアーが知られている。また、アムラプラ北西ベバンデム（Bebandem）地区のシベタン（Sibetan）村では、日本でスネークフルーツ（snakefruit）として知られるサラク（salak）という果物を題材とす

表4 バリの行政区域別人口と面積

行政区域	男性人口（人）	女性人口（人）	人口計（人）	面積（km ² ）
ブレレン（Buleleng）県	305,198	312,878	618,076	1,365.88
ジュンブラナ（Jembrana）県	110,392	114,598	224,990	841.80
タバナン（Tabanan）県	201,046	204,438	405,484	839.33
バドゥン（Badung）県	190,109	184,268	374,377	418.52
ギャニャール（Gianyar）県	192,130	191,461	383,591	368.00
クルンクン（Klungkung）県	83,468	87,276	170,744	※315.00
バンリ（Bangli）県	105,344	105,842	211,186	520.81
カランガサム（Karangasem）県	196,703	198,706	395,409	839.54
デンパサール（Denpasar）市	239,036	224,879	463,915	123.98
合計	1,623,426	1,624,346	3,247,772	5,632.86

BPS Province of Bali (Bali in number 2006)を基に作成。http://www.balitourismboard.org/bali_population.htm アクセス日：2012年1月10日

※バリ島側の面積は112.16 km²、ペニダ島等の面積は202.84 km²

19) バリ・アガとは、バリ原住民であることを貫き、ヒンドゥー教への改宗を拒否した人々をいう。詳しくは、大槻重之「インドネシア専科—F 社会—7 章少数民族—660.バリアガ/バリ島原住民」
http://www.jitk.zaq.ne.jp/bachw308/page057.html#660 アクセス日：2012年1月10日、大谷聡・後藤隆太郎・中岡義介「バリ島デサ・アダット・タロのモノグラフ」『佐賀大学理工学部集報第32巻2』（2003年12月、19頁－29頁）を参照。

る観光ツアーも行われている。以上の村の観光ツアーは、日本語のインターネットサイトでエコツアーとして宣伝されているケースが散見されるが、実質的な内容は農家体験観光であり、エコツーリズムというよりもグリーンツーリズムに近いように解される。さらに、ルンプヤン岳の中腹にはパワースポットとして知られるルンプヤン寺院 (Lempuyang Temple)、パダンバイ西の県境にはこうもりの洞窟で有名なゴア・ラワ寺院 (Pura Goa Lawah) があり、これらはブサキ寺院同様、バリの九大寺院の中に数えられる。この他、トレッキングやマウンテンバイク等のアクティビティがあるものの、その種類は限られている。総じてカラングサムの山側では、観光ツアー、観光ガイドは少なく、宿泊施設も規模が小さい。

一方、アムラプラの南東にあるトゥンプ (Tumbu) という漁村には、水の王宮跡のウジュン (Ujung) があるが、ここからの海と棚田の眺望は絶景であり、地震によって王宮は崩壊したものの、2004年に史跡公園として再生されている。海側には比較的観光名所が少ないものの、生物が豊富で魅力的なダイビング・スポットや大小さまざまな宿泊施設が道路沿いに点在しており、70年代以降、世界中から多くのダイバーを集めてきた。現在、カラングサムを観光するための宿泊施設を旅行代理店やインターネットの予約サイトを通じて確保しようとする、たいていは海側にあるホテルを利用することになる。海側に宿泊施設が圧倒的に多いのは、「観光のまなざし」が山側ではなく海側に向いているからである。とりわけ、リピーター観光客の多くはダイバーであり、彼らはカラングサムの海で水中エコツアーを楽しむためにこの地にやって来る。

(2) カラングサムの主なダイビング観光村

カラングサムの主なダイビング・スポット²⁰⁾は、基本的に漁村によって運営されている場合が多い。例えば、デンパサールから東海岸に沿って車で2時間ほど移動するとカラングサムの県内に入るが、県境を越えた所には、パダンバイというダイバーに知られた漁村がある。ビーチには比較的安価なレストランや宿泊施設が立ち並び、ジュクン (小型ボート) に乗れば、浜から5分程度の移動時間でもってウォール (Wall)、ブルー・ラグーン (Blue Lagoon)、テンプル (Temple)、タンジュン・ジュブン (Tanjung Jupun) といった複数のダイビング・ポイントにたどり着く。また、ここからはロンボク (Lombok) 島方面へのフェリーも運航されている。

次に、パダンバイからアムック湾 (Teluk Amuk) を挟んだ北東の方向に、東部で最大のリゾート地チャンディダサ (Candidasa) がある。ここも落ち着いた雰囲気のある漁村であり、チャンディダサ寺院を中心に観光地としては比較的地味な場所

20) 詳しくは、David Pickell and Wally Siagian, *Diving Bali: The Underwater Jewel of Southeast Asia 2 edition*, Periplus Editions, 2010. を参照。

といえる。沖合にミンパン島 (Gili Mimpang)、テペコン島 (Gili Tepekong)、ビアハ島 (Gili Biaha) という 3 つの島嶼があり、ジュクンで移動すればこれらのポイントで潜ることができる。大型の海洋生物に遭遇することで知られているが、流れが速く水温もやや低いので、中級・上級のダイバーに限定され、初心者ダイバーが楽しめるポイントとはいいいがたい。

また、チャンディダサから北東にあるアメドは、塩田が広がる小さな観光村であり、静かな雰囲気の中、比較的安価な宿泊施設が点在し、長期滞在の欧米人観光客が目立つ。海況が安定しており、ダイビング講習や体験ダイビングの実施が可能であり、その一方でドロップオフ (サンゴ礁が垂直に近い形で深場に落ちている場所) では、潮の流れに乗って水中を移動するドリフト・ダイビングも可能である。種々のサンゴやマクロ生物も豊富であることから、ベテランダイバーや水中カメラの愛好家を含めて、入門者から上級者まで楽しめる複数のポイントがある。

さらに、アメドから約10Km北西にあるトランベン (Tulamben) は、年間を通じて降雨量が少なく、海の透明度は比較的良好である。リバティ・レック (Liberty Wreck)、トランベン・ドロップオフ (Tulamben Drop-off)、パルン・パルン (Palung-Palung)、バツ・ケレビット (Batu Kelebit) というポイントがあるが、最も有名なポイントはリバティ・レックである。ここはポイント名の通り、日本軍の攻撃を受けて浜に座礁し、その後アグン山の噴火によって海底に沈んだアメリカの輸送船リバティ号があり、120mほどの船体の各所に様々な生物が群がっている。沈船はビーチから30mほどの近い場所にあり、最大水深も30mより浅いので、初心者でも十分にアクセス可能であるばかりか、上級者でもダイビングを十分に堪能できる。ダイビング講習や体験ダイビングの実施も可能であり、沈船の近辺ではギンガメアジの渦巻状の大群を容易に観察できるので、リピーターのダイバーも少なくない。

最後に、トランベンの約 7 Km北のクブ (Kubu) についてである。このポイントは、以上に紹介したポイントに比べて知名度が低かったが、ドイツのダイビング協会の協力を受ける形で、このところ急速に開発が進んでいる。現地の政府機関は、今後、クブはカラングサム内で最も有力なダイビング・ポイントになる可能性が高いと評価している。

(3) カラングサムと競合するダイビング観光地

以上、カラングサムのダイビング・ポイントを見てきたが、バリ島周辺のスクーパダイビングはカラングサムのポイントに限定されない。まずデンパサールに近いサヌールとヌサドゥア・ブノア地域であるが、サヌールの場合、小さな生物の撮影が好きなダイバーにはそれなりの楽しみ方があるものの、透明度や生物の多様性の点で劣後するため、一般的なファン・ダイビングを楽しむ場所としては魅力に欠ける。しかしながら、バリ最初のリゾート地にあって宿泊や飲食の施設

に事欠かず、何よりも空港から20分程度の近距離にあるので、滞在期間が短い観光客はここを利用する可能性が高い。

次にヌサドゥア・ブノア地域であるが、2010年8月28日に筆者が現地の海底を観察したところ、死んだサンゴが多く目に付き、魚影もそれほど濃くなかった。ダイビング・ポイントには時々強い流れが入ってくるので、体験ダイビングや入門者向けの講習を実施する場所としては必ずしも最適な場所ではない。とはいえ、ヌサドゥアには高級リゾートホテルが集積しており、ブノアはマリンスポーツの中心地であるので、様々なアクティビティを楽しみたい観光客にとっては魅力的な場所である。

以上の地域は、滞在時間の短い観光客がダイビングに興じ、あるいは講習を受けることができる場所として知られている。これに対して、ヌサドゥア地域から海を隔てて西方に位置するペニダ地域は、潮の流れが速いことから、本格的なドリフト・ダイビングによってマンタ等の大型の海洋生物を鑑賞するポイントとして知られている。ペニダ島とその北西に位置するレンボンガン島（Nusa Lembongan）等で構成される海域の透明度は20mを超え、サンゴも海洋生物も豊富であるが、水中での安定した基本スキル（潜降と浮上に手間取らない、耳抜きや中性浮力に支障がない、余裕を持ったフィンキックで無駄にエアーを消費しない等）が必須となることから、ある程度の経験本数を持った中級者以上に適したポイントといえる。

この他、ロンボク島のギリ地域は、主にトラワンガン島（Gili Trawangan）、メノ島（Gili Meno）、アイル島（Gili Air）の三つの島から構成される。ヌサドゥア・ブノア地域と同様にスクーバダイビング以外の様々なマリンスポーツを楽しむことができ、ペニダ地域と同様に海の透明度が安定的に良好で、初心者向けのポイントから中級者以上のポイントまで揃っている。バリ島からは50キロほど東方に離れており、小型ボートでの移動は難しいことから、アクセスは、飛行機、高速船、フェリーを利用する方法が一般的である。移動に費用と時間がかかるものの、ファン・ダイビングの料金はバリ島に比べて少々割安であり、ガイドの技量もバリ島のそれと比べて遜色ない。カランガサムのパダンバイから船が出ている点を考え合わせると、ギリ地域もカランガサムにとっても競合する地域といえる。

3——カランガサムのエコツアーの現状と問題点

(1) カランガサムのエコツアーの特徴

カランガサムのエコツアーの特徴を考察するには、統計データを活用して仮説を立てるのが有効であろう。しかしながら、一般の観光ツアーとエコツアーの峻別は必ずしも容易ではなく、一般の事業者とエコツアー事業者とは必ずしも明確に区別されているわけではない。旅行者についても、一般の観光ツアーを利用し

ながら部分的にエコツアーに参加する者も少なくない。さらにバリの村落は行政村と慣習村の二種類に分かれていて、観光開発の主体となるのは慣習村であることも計量的な分析を難しくする要因の一つになっている。このような点をふまえ、以下では、主としてカラングサムで行った聞き取りの結果を基にしてエコツアーの現状を整理する。

2009年8月、筆者が最初に聞き取り調査を行ったのはティルタガンガ付近でバンガローを経営する現地人男性と日本人女性の夫婦である。はじめに、観光客の特徴について質問すると、「空港周辺の観光地と異なり伝統文化が色濃く残されているので、バンガローに宿泊する欧米人には、古都の風情をのんびり味わうために長期間滞在する観光客が多い」とのことであった。次にエコツーリズムの実施状況についてたずねたところ、「我々もエコツーリズムの考え方には賛同するが、この地域ではエコツアーの種類は限られまだまだ発展途上である」、「エコツアーはデンパサール周辺の観光業者が企画、募集するものであり、ここではそのようなツアーを紹介する会社はない」との答えが返ってきた。独特な習慣を保持してきたことで知られるバリ・アガについても、「ここではみな同じような暮らしをしている。昔ながらの生活をしている人々がどこにいるかはよく分からない」という。また、アグン山のトレッキング・ツアーに参加する観光客の状況についてたずねたところ、「少数の観光客がアグン山に登るものの、暑い気候の中での山登りは辛いので、登山ツアーの参加者は極めて少ない」とのことであった。

さらに、スクーバダイビングの状況について聞いてみると、「ダイバーの大半はダイビング・ポイントに隣接した宿泊施設に集中し、ここのバンガローに宿泊する観光客の中では、ダイバーは極めて少ない」ことが確認された。ちなみに、筆者がこのバンガローを訪れて最初に感じた点は、海からの距離がそれほど離れていないのに標高が300 m²¹⁾程度と予想以上に高いことであった。既述の通り、スクーバダイビングの後は高所移動を避けるのがダイバーの基本原則であることから、おそらくダイバーの宿泊客は少ないであろうと推測したが、バンガローの経営者への質問によって、ダイバーは基本的に海側に宿泊し、山側には宿泊しないことが確認できた。要するに、カラングサムを訪れる観光客は、アムラプラの景勝地が集積する山側で過ごす少数派の観光客と、海岸沿いのビーチ・リゾート周辺に滞在するダイバーを中心とする多数派の観光客に分断されているということである。

なかなかエコツアーの手がかりが得られない中、「ケチャ」の原形となる伝統芸能についてたずねてみると、宿泊したバンガローの経営者が主宰となって、地元の人々をメンバーとするパフォーマンスを定期的に開催しているとのことであ

21) 標高の計測については、Topocoding APIのサイト<http://topocoding.com/>にアクセス（2012年1月10日）し、An example with Google mapを使用した。

った。バンガローの経営者は、聞き取り作業を終了した後、メンバーを集めて伝統芸能を披露してくれた。パフォーマンス自体は「ケチャ」に比べて地味なものであったが、学術的に興味をそそられる実演であった。一般人も実演の場に立ち入ることが許されるので、エコツアーのアクティビティの一つとして有力である。ただし、語りはもっぱら現地の言葉によるものであり、英語で書かれたパンフレットや資料もなく、一般の観光客が伝統舞踊の内容を理解することは難しいと思われる。

この他、アグン山周辺の観光アクティビティをたずねたところ、マウンテンバイクによるトレッキングが主流であると紹介された。これについては、宿泊施設のドライバーが当該アクティビティのガイドを担当しているとのことなので、実際に体験することにした。アグン山は予想通り火山噴火の影響で動植物の種類はそれほど豊富ではなかったが、3時間余りのトレッキング²²⁾の途中、風光明媚な棚田や伝統的な農家に立ち寄って自然と文化に接する内容になっていた。しかしながら、当該ガイドは全くインタープリターやツアーガイドとしての研修を受けておらず、エコツアーというよりは完全なスポーツアクティビティであった。

その後、同年8月28日にはウダヤナ大学を訪問し、当該研究プロジェクトの共同研究員であるグディ・ワルミカ (Gde Ketut Warmika) 氏の紹介で、同大学において観光開発を研究課題とする複数の研究者と懇談することができた。その際、聞き取った上記の内容を説明して意見を求めたところ、基本的に現地の実情を反映したものであるとの答えが返ってきた。さらに、陸のエコツアーはカラングサムだけの問題ではなく、バリ全体を見渡してもまだ発展途上の段階であること、スクーバダイビングを中心とする海のエコツアーは、バリの中でもカラングサムが最も盛んであることも再確認することができた。

さらに筆者は、2010年8月、カラングサムのエコツアーの調査結果を全体的に検証すべく、旅行会社でディレクターを担当するT氏からも聞き取り調査を行った。T氏の話の要点は次の通りである。

①バリの場合、環境に配慮したツーリズムは事業的に成り立ちにくい。②アグン山トレッキングも、朝4時開始という厳しいスケジュールなので、観光商品として扱いにくい。③アグン山をマウンテンバイクで下るアクティビティも、一度体験した観光客はもう一度やろうとはしない。④スクーバダイビングを楽しみにバリに来る観光客は多く、サヌールのあるホテルでは、スクーバダイビングを楽

22) マウンテンバイクによるトレッキングの内容は、まず現地人のドライバーとガイドが自動車でツアー客をレンタルバイクの店まで連れて行き、そこでマウンテンバイクのレンタル契約とレンタル料金の支払を済ませ、その後マウンテンバイクを自動車の後部に収納し、トレッキングルートの開始地点となるアグン山中腹まで移動するという形から始まる。開始地点は、アグン山中腹の自動車が行き止む限界点でもあり、そこに到着すると、自動車からマウンテンバイクを降ろし、ドライバーは自動車を運転して先にレンタルバイクの店に戻り、後はガイドとツアー客がマウンテンバイクで山を降りながら、いくつかの見所に立ち寄るという仕組みになっている。

しむ観光客でいつも満員の状態である。⑤外国人ダイバーに対し、一般に旅行会社はイギリス人または日本人が経営するダイビング業者を紹介し、現地人が経営者であるショップは紹介しない。⑥スクーバダイビングを楽しむ外国人観光客がカラングサムで宿泊する場合、チャンディダサのリゾートホテルに宿泊することが多い。⑦日本人の場合はほとんどチャンディダサに宿泊しない。彼らは日本人が多く滞在する地域を好むので、たとえ移動距離が長くかかっても、サヌールに宿泊してカラングサムまで潜りに行くことになる。⑧スクーバダイビングは、必ずダイビングの専門業者を紹介する。

T氏の話からすると、カラングサムに限らず、バリの主力のエコツアーは、山間部よりもスクーバダイビングによる海中ツアー（ファン・ダイビング）が盛んとのことであった。また、カラングサムの場合、チャンディダサのリゾートホテルが外国人観光客の拠点になるが、日本人の場合はほとんどチャンディダサに宿泊しないようである。その理由については、宿泊施設やスクーバダイビングのインストラクターおよびガイドの中で日本語に通じた者が少ないことも一因と考えられる。

(2) カラングサムの観光政策

バリの政府関係者は、少しずつではあるがエコツーリズムの考え方を観光政策に取り入れてきた結果、表面的には各地でエコツアーが実施されているように見える。確かにインターネットのサイトで情報を検索すると、エコツアーを銘打った種々の周遊観光に接することができるが、内容を詳しく見ると、インタープリテーションやインタープリターについての情報を欠き、一般の観光ツアーをエコツアーと称しているだけに過ぎないものが散見される。この点については「インドネシアでのエコツーリズム推進の動きは高まっているが、実情としては、それを運営するために必要な財政的かつ技術的能力が備わっていない。さらに、インドネシアでは政府機関でさえ、エコツーリズムをネイチャーツーリズムと混同しているため、その推進は自然や文化保護などに貢献するどころか、逆にそれらの破壊につながる危険性がある」²³⁾との指摘もある。

カラングサムの場合、エコツアーを実施できるだけの観光資源を有するにもかかわらず、2009年の現地調査の際は、政策的にエコツーリズムを推進しているように見受けられなかった。そこで観光政策の実態を確かめるため、後日、行政の責任者との面談の機会を探った結果、翌2010年の8月27日にカラングサム県長、カラングサム観光協会会長、カラングサム駐在観光省部長と懇談することができた²⁴⁾。

23) 井澤友美「インドネシア・バリ州におけるエコツーリズムへの期待と課題—背景・実態・課題」『立命館国際関係研究第8号』2008年10月、17頁。

24) ちなみに、面談したチャンディダサのホテルの会場では、たまたまスピリチュアル観光（pariwisata spiritual）のためのセミナーが行われていた。

まず、県長から聞き取った内容は次の通りであった。①2010年中に観光の地方性法規を完成する、②これからは文化観光やスピリチュアル観光に力を注ぐ、③スピリチュアル観光は寺院を中心にヒンドゥー教とヨガを組み合わせた内容にする、④大型船舶が停泊できるように2011年の間に新しい港を建設する、⑤交通の便を図るため県内の道路は適宜整備している、⑥ドイツのダイビング協会の指導を受けながらクブ（Kubu）のダイビング・スポットを開発している、⑦現地調査によりクブではサンゴ礁が予想以上にすばらしいことが判明している、⑧クブではリゾートホテルを建設中である。

こちら側から「海はスクーバダイビングによるエコツアーが盛んであるが、山のエコツアーは発展途上ではないか」と質問すると、「山はアグン山のトレッキングが中心となるが、カランガサムでは、サラクという果物を題材としたアグリツーリズムにも力を入れている」という答えが返ってきた。海と山で財政的に収入がどう違うかについては、「そういった統計データはないので分からないが、観光業収入は約65%、工業収入が約35%を占める」という回答であった。また、人材育成については、農業では優秀な人材を日本に派遣しているものの、観光業では特に実施していないとのことであった。

次に、ダイブリゾート社長を兼務する現地の観光協会会長から聞き取り調査を行った。彼の話によると、「カランガサムではマリンレジャーがメインのアクティビティになっているが、トランペンよりもクブの方がダイバーは増えつつある」、「山側についてはアグン山トレッキングに力を入れており、トレッキング後にバリ料理の食事会を企画したり、パラグライダー用の場所を整備したりしている」とのことであった。また、新たな情報として、単なる観光だけでなく、結婚式をカランガサムの村で行う欧米人が増えていることも確認できた。

さらに、カランガサム駐在観光省部長との懇談内容である。同氏は、当日開催されていたスピリチュアル観光セミナーに触れて、「まずはスピリチュアルの概要を知ることが大切である」と語りながら、「スピリチュアル観光をバリの観光の中心に置き、ヨガの観光サービスを通じてさらに観光産業や施設を拡大させていく」との抱負を述べていた。

以上の三者から聞き取った事柄は、いずれもカランガサムの観光開発を通じて港湾、ホテル、その他の観光施設の建設に結びつきやすい内容であった。これらの点は、県長の本業が建設業であることと少なからず関係があるものと推測されるが、結果的に、自然保護に関する観光政策やエコツーリズムに対する政策的な取り組みについては、サラクを題材としたアグリツーリズムおよびクブのダイビング・スポット開発を除いて情報を得ることができなかった。前者については現地調査の中でほとんど情報を得ることができず、そもそもエコツーリズムの概念自体を誤解している可能性がある。一方、後者のダイビング・スポットに関わる観光施設については、カランガサムが従来から継続的に投資を行ってきた項目で

あり、水中エコツアーと観光客との関係を考える上で検討する必要がある。そこで次節では、カラングサムのスクーバダイビングとダイバーの関係について見ることにする。

(3) カラングサムのスクーバダイビングとダイバーの関係

カラングサムには、既述の通り特徴の異なるダイビング・ポイントが集まっており、その周辺にはダイビングおよび観光の施設が集積しているので、複数のポイントを使い分けることで、スクーバダイビングに求められる設備と条件をすべて満たすことができる。それゆえ、カラングサムの海は、スクーバダイビングを実施する上で、理想的なフィールドといえよう。

とはいえ、滞在時間の短い観光客は、ショッピングや空港までのアクセスに便利なデンパサール周辺に宿泊するのが便利である。また、ガイドやインストラクターの多くがデンパサール周辺に居住していることもあり、デンパサールから近距離にあって比較的海況が穏やかなサヌールやヌサドゥア・ブノアのポイントを利用することが多く、ダイビングショップもバリ島南部に店を構え、必要に応じて適したダイビング・ポイントに移動する形が効率的になる。それゆえ、短期間の滞在でスクーバダイビングを体験したい、あるいは認定資格を取得したい者の多くは、サヌールおよびヌサドゥア・ブノア地域を選択すると考えられる。

さらに、本格的なドリフト・ダイビングやマンタ等の大型の海洋生物を鑑賞したい中級者以上のダイバーは、日帰りでレンボンガン島やベニダ島でのファン・ダイビングを楽しむのが経済的かつ効率的であるから、サヌール周辺に宿泊する可能性が高い。島嶼地域では風向や海況が変わっても利用できるポイントがどこかで見つかるので、複数の小さな島から構成されるベニダ地域やギリ地域は、カラングサムのポイントより融通性が利く。そうすると、カラングサムがターゲットにできる顧客層は、比較的長期の滞在が可能なダイバーということになる。とはいえ、長期滞在が可能なダイバー観光客の中には、カラングサムではなくギリ地区での滞在を選択する者も少なくないので、カラングサムが長期滞在予定のダイバー観光客に関して必ずしも優位性を有しているわけではない。

一方、長期滞在が可能なダイバーは、スクーバダイビングだけでなく、自然や古都の風情を楽しむ可能性もあるので、カラングサムの観光業全体にとって有力な顧客層である。しかしながら、カラングサムは海浜地域を除くと海拔300m（スクーバダイビング直後の移動における一般的な高所限界点）を超える高所に観光地が点在する。スクーバダイビング直後のダイバーは、減圧症予防の観点から高所への移動を避けるので、アクセスできる場所は限られる。このようにスクーバダイビング終了後の一定時間は高地に移動できないという制約条件は、観光ポイントの多くが高地にあるカラングサムにおいて、ダイバーと一般の観光客を二分する大きな原因になっている。現状のままであれば、バリに来るダイバーが増えた

としても、ダイビングを終了した後でカラングサムの山側の観光施設を利用するケースは少ないと考えられる。山側の観光施設がダイバーの顧客をより多く受け入れようとするならば、ダイビング前にまず山側で観光をしてもらう必要があるが、そのようにダイバーを導くには、かなり魅力的な企画を提示しなければならないであろう。

(4) エコツアーガイドの現状と問題点

どの地域についても当てはまることであるが、専門のガイドの養成はエコツアーの発展にとって不可欠である。例えば日本の屋久島等のエコツアーが盛んな地域で多く見られるエコツアーガイドの典型的なインタープリテーションは、カラングサムの現地調査を通じて接することができず、またスクーバダイビングによる海中ツアーを除くと、地元では専門的なエコツアーガイドの存在も確認することができなかった。

カラングサムの場合、もはや1930年代に「最後の楽園」と評された佇まいを感じるには相当な想像力を必要とする。山側に観光の題材がないわけではないが、観光客が圧倒されるような風景を感じる場所にたどり着くには、かなり厳しいトレッキングを実施しなければならない。それゆえ、トレッキングをせずに自然観光を楽しむ観光客に対しては、専門的なエコツアーガイドの卓越したインタープリテーションがない限り、ジョン・アーリ (John Urry) が概念化した「観光のまなざし」²⁵⁾ を形成することは容易ではないであろう。一方、海側に関しても、スクーバダイビングを楽しみに来る観光客が圧倒的に多いにもかかわらず、それらの観光客を受け止めるだけの技能と経験を有するガイドやインストラクターを地元から供給できないという問題がある。このように、現地の人々がエコツアーを実施する上で必要な知識、経験、資金をほとんど有していないことは、魅力的かつ地元の人々に利益が還元されるエコツアーを実施する上で大きな障害になっている。カラングサムの県長への質問のうち、人材育成については、農業では優秀な人材を日本に派遣しているものの、観光業では特に実施していないとの回答があった。観光旅行産業の人材育成がGDPの増加や雇用の創出に与える影響が見えにくいことも一因と推測されるが、エコツアー商品として整備するには、専門のインタープリターが顧客に分かるように説明をし、解説のパンフレットを完備する等の工夫が必要である。

さらに人材の育成に関して、筆者はウダヤナ大学観光学部の教員との懇談会の際、スクーバダイビングのガイドやインストラクターの養成に関する科目がカリキュラムに組み入れられているか否かについて質問を行った。すると「アトラク

25) 詳しくは、ジョン・アーリー著・加太宏邦訳『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』（法政大学出版局、1995年）を参照。

ションという科目の中でスクーバダイビングを入門的に紹介しているだけ」との答えが返ってきた。さらに、なぜスクーバダイビングの実技講習をしないのか質問すると、「国家が定める大学のカリキュラムの中にスクーバダイビングが入っていないから」との説明があった。大学としては、国家が定める大学のカリキュラムの中にスクーバダイビングが入っていないことから、実技を授業科目に組み入れることができないようである。スクーバダイビングのスキルの獲得が及ばず経済効果を見通しにくいから、大学のカリキュラムの中に組み入れられないのではなかろうか。

現地の人々にとって好ましい観光の仕組みを作り出すには、まずもってどのように人材育成と雇用促進を図ることができるかを検討しなければならない。そのためには、現地人ガイドのおかれた実際の状況を確認し、検討を加えておく必要がある。そこで以下では、スクーバダイビングの現地人ガイドからの聞き取り結果を基にしながら、エコツアーにおける人材育成の課題と解決策について検討を行うこととする。

はじめに聞き取り調査を行ったのは、2009年8月に宿泊したバンガローから紹介されたスクーバダイビングの現地人ガイドS氏である。S氏はダイビング経験が豊富であるのみならず、日本に長期間滞在した経験を有し、日本語も堪能であった。S氏からは、同年同月27日と28日の二日間、トランベン、アメド、パダンバイという現地の主なダイビング・ポイントの案内を受けることができた。S氏のダイビング経験は千回を超え、そのダイビング技術は申し分ないものであったが、聞き取り調査の時点でS氏のランクは大手スクーバダイビングP団体のレスキュー・ダイバーであり、ワンランク上位で同団体のプロのダイバーに相当するダイブマスターの資格は得ていなかった²⁶⁾。この点を皮切りに聞き取りを進めたところ、①カランガサムでスクーバダイビング講習を担当するインストラクターには欧米人や日本人が多い、②自分のスクーバダイビング資格は日本人インストラクターから認定を受けたものである、③カランガサムで活動するインストラクターやガイドの多くはダイビングショップが集中する空港周辺の大きな街に居住している、④自分はカランガサムの漁村の実家に住んでいるが、村の関係者でインストラクター資格を持っている者はほとんどおらずガイドも少ない、⑤スクーバダイビングで村の関係者が従事する仕事は施設管理やタンクの配送といった低賃金労働が中心となる、⑥できれば自分もスクーバダイビングのプロ資格の認定を受けたいが、いろいろ費用がかかるので負担が大きい、⑦現地の言語で書かれた教材がない点も資格をランクアップする上で障害になっている、⑧自分はもう少し努力すればダイブマスターになれると思うが、そこからインストラクターに

26) S氏は2010年度にダイブマスターにランクアップした。

なろうとすると講習費用や教材費が高いので容易でない、といった点が確認できた。

以上の点をふまえた上で、筆者は比較検討のため、翌2010年の8月に、カラングサムとスクーバダイビング観光で競合関係にある隣のロンボク島の現地ダイビングショップBのダイブマスターT氏²⁷⁾に対しても聞き取り調査を行った。ロンボク島の場合、聞き取り調査の時点でインストラクターは約50名、そのうちインドネシア人は約10名で、約40名いる外国人インストラクターの大半はイギリス人とのことである。収入については、講習を担当できないダイブマスターの給料は固定給だけであるが、インストラクターになると固定給に食事手当が付き、さらに講習料金の30%に相当する手当が加算されるので、一般庶民の収入を大きく上回り、生活が安定するようである。T氏は、年内に大手ダイビング団体Pのインストラクター開発コース（IDC）を受講する予定²⁸⁾とのことであり、インストラクター試験（IE）の合格可能性を聞いてみると、「実技試験には自信があるが、インドネシア語の教材がなく全て英語版で講習が行われるので、筆記試験がとても難しい」との答えが返ってきた。講習と試験にかかる費用を尋ねたところ、IDCが日本円で約15万円、IEが約5万円、合計20万円程度とのことであった。費用の負担は大きい、最近、インストラクターになるための費用をインドネシアの輸出入銀行から無利子で借りることができるようになったので、IDCの受講を決心するのに弾みがついたようであり、インストラクターになれば、輸出入銀行からの借入金もおおよそ3年程度で返済できるとも語っていた。

聞き取り調査の結果からは、カラングサムのみならず、バリ全体でスクーバダイビングの業務に就業する現地人に対し、ほとんど公的な教育や支援がなされていないため、多くはタンクの充填や器材運搬あるいはボート操船といった比較的単価の低い労働に従事していることが明らかになった。また、一部の現地人の中に、何らかのショップに所属しながらフリーで仕事を受ける者がいるものの、インストラクターやガイドの資格を得るには多額の費用がかかる上、教材が母国語で書かれていないことから、プロのガイドに相当する資格を持たずに仕事をしている者が少なくない²⁹⁾。結局、以上の点が重なり合って、スクーバダイビングのインストラクターやガイドといった報酬の高い仕事は、カラングサムの人々にとってアクセスしにくいものになっている。また、様々な問題を解決し、カラング

27) 彼はイスラム教徒であり、筆者が訪問した時期がラマダンであったため、昼間の断食期間に水分補給をしない状態で潜水業務に従事していた。元々はスクーバダイビング以外のマリンスポーツ関係のスタッフ業務を担当していたようであるが、スクーバダイビングのガイド業務の収入が高いことから転職したとのことであった。

28) T氏は、インストラクターの資格を取得した後、ダイビング業者を紹介する旅行代理店を開業するのが最終目標であると語っていた。

29) 学校教育の中で英語を共通の言語とするフィリピンの場合、現地の人々の多くは英語の教材を読み書きできるので、地元の人々がガイドやインストラクターの職に付くケースが少なくない。

サムの人々にとっても利益になる観光の仕組みを作るには、国家及び地方政府がスクーバダイビングを観光業の一つとして認知し、一定の財政支援を行いながら、公的な教育の場を拡充する必要がある。

—— むすびにかえて

現地調査の結果をふまえる限り、カラングサムの山側では静かな雰囲気の中で伝統文化が温存されている。しかしながら、政府が主導したエコツーリズムは、その概念自体が正確に伝達されないまま誤解を引き起こしており、人材不足の要因から「観光のまなざし」を獲得するに至っていない。また、カラングサムは透明度が高く多様な生物を観察できる海に面していてスクーバダイビングが盛んであるが、主として外国人のインストラクターやガイドが外国人観光客を対象に活動を行っており、インストラクターやガイドのプロ資格を取得するための様々な障壁は、現地の人々が主体的に参加する道を険しくしている。現地の行政機関は、スクーバダイビングの観光客が多いことを認知していながら、どちらかというとりゾートホテルや港湾整備といった大型の工事と関連させながら観光政策を実施する傾向があり、現地の人々がインストラクターやガイドとしてふさわしい能力を身につけるよう支援する策はほとんど講じられておらず、学校教育の場でもそのような人材育成のカリキュラムを制度的に組み込む動きはない。さらに、スクーバダイビングの後は高所への移動が制限されることから、海側と山側の観光は相互に隔絶されたものとなっている。

これらの問題を政策的に解消するためには、まずもって、国、州、県の各レベルの政策担当者および地元の観光業者がエコツーリズムの概念を正確に理解するとともに、スクーバダイビングを中心とする観光の特殊性に配慮しなければならない。その上で、人材育成を支援するための制度改革や財政的措置を講じる必要がある。また、伝統文化が温存されている山側の魅力をリピーター観光客の多いダイバーに訴えかけるとともに、スクーバダイビングのアクティビティを実施する前の段階で山側の観光ポイントを周遊する旅程に組むよう外部の旅行企画会社に働きかける必要もある。日本から見ると、これらの課題を解消するためには、国際協力を推進する枠組みの中で支援策を検討できる余地が十分にあると思われる。

《参考文献》

- ジョン・アーリ著・加太宏邦訳『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局、1995年。
- 山下晋司『バリ観光人類学のレッスン』東京大学出版会、1999年。
- 間苧谷榮「バリにおける観光業と伝統的舞踊—インドネシアにおける開発と文化」『亜細亜大学国際関係紀要第1巻第1号』（1991年11月、67頁—93頁）。
- 大谷聡・後藤隆太郎・中岡義介「バリ島デサ・アダット・タロのモノグラフ」『佐賀大学理工学

- 部集報第32巻2』(2003年12月、19頁－29頁)。
- 間苧谷榮「バリ島における観光業と寺院システム—観光と社会文化変動に関する研究(その一)」『亜細亜大学国際関係紀要第15巻第1号』(2005年9月、53頁－73頁)。
- 今野裕昭「バリの観光開発と共同体的村落——グローバル化と地方分権化に晒されるデサ」『ヘスティアとクリオNo.2』(2006年、49頁－67頁)。
- Freeman Tilden (Author), R. Bruce Craig (Introdoction), Russell E. Dickenson (Foreword), *Interpreting Our Heritage*, 4th edition, The University of North Carolina Press, 2008.
- 国土交通省「観光投資に関する調査・研究報告書 概要版」2007年3月。
- 井澤友美「インドネシア・バリ州におけるエコルーズムへの期待と課題——背景・実態・課題」『立命館国際関係研究第8号』2008年10月、1頁－22頁。
- David Pickell and Wally Siagian, *Diving Bali: The Underwater Jewel of Southeast Asia*, 2nd edition, Periplus Editions, 2010.
- 吉田竹也「バリ島のエコツーリズムの逆説」『島嶼研究第11号』(2011年3月、35頁－43頁)。

[こばやし まさのり]